

大分市埋蔵文化財調査概要報告 2018

平成 29 年度版



大分市中心部の道路変遷図

大分市教育委員会 2019

序 文

本書は、平成29年度に大分市教育委員会事務局が実施しました埋蔵文化財の調査の概要を報告したものです。

本市教育委員会では、個性豊かな文化・芸術の創造と発信を基本方針として、郷土の先人たちが営々と築き上げ、守り育てた大切な文化財の保護・保存・活用に取り組んでおります。

このような状況の中、文化財保護法に基づく届出が近年、市街地区に集中する傾向があり、文化財保護と開発事業の調整そして適切な発掘調査の実施が強く求められているところでございます。

平成29年度は、市内75箇所では埋蔵文化財の調査を行い、府内城の内々堀や古絵図に描かれた戦国時代の街路の場所などを特定することができました。

本市は、江戸時代には府内城を中心に城下町が建設され、戦国時代には西洋にまで知れ亘った中世大友府内町が、そして奈良・平安時代には豊後国府が造られたという誇るべき歴史のある街です。

このため、市街地区を中心にこれらの遺跡が広域に分布しており、本市の歴史特性をこれからのまちづくりに活かす上でも、文化財の保護と開発事業との円滑な調整を図る一層の取り組みを進めて参りたいと考えております。

最後になりましたが、日頃より本市の文化財行政にご理解とご協力を賜っております皆さまに對しまして心から感謝申し上げます。

平成31年3月27日

大分市教育委員会

教育長

三浦 享二

例言・凡例

1. 本書は、大分市域において大分市教育委員会が平成29年度に行った埋蔵文化財調査の概要報告書である。
2. 調査地点は、第1～3表および第2～5図に示している。図の番号は第1～3表の報告番号と同じである。
3. 本書の執筆は担当者が分担して行い、文末に執筆者名を記している。
4. 第3章の受贈図書目録は、平成29年4月1日～平成30年3月31日の間に大分市教育委員会事務局文化財課に受贈された書籍等を掲載した。なお、受贈図書目録の作成は、文化財課臨時職員 広瀬奈美子・丸田梢が行った。
5. 本書に掲載された遺跡調査の資料整理は、調査担当者をはじめ、文化財課嘱託職員及び臨時職員が行ったものである。本書掲載遺物の実測・トレースは小野綾夏（文化財課 埋蔵文化財担当班、現在は文化財保護調整担当班）・塩地潤一（大分市歴史資料館 学芸調査担当班）が行った。
6. 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。掲載図中の座標は、特に断りがない限り世界測地系の平面直角座標Ⅱ系のX・Y座標を基点として表記している。ただし、大友氏館跡、中世大友府内町跡、城原・里遺跡は日本測地系の座標値に基づく。
7. 本文中に掲載した現場写真は、各調査担当者が撮影したものである。
8. 本書の企画構成は塩地が行い、編集は米倉加奈絵・荒木伴世（大分市歴史資料館 学芸調査担当班）が行った。
9. 出土遺物および調査の記録・資料は大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原337番地の5）に保管している。

本文目次

第1章 平成29年度の文化財保護と開発事業の調整	1
1. 周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲の変更と追加	1
2. 調査の件数と場所	1
3. 調査組織	5
第2章 埋蔵文化財の調査概要報告	7
1. 大友氏館跡 第36次調査	7
2. 大友氏館跡 第37次調査	11
3. 上原館跡 第10次調査	12
4. 上原館跡 第9次調査	14
5. 中世大友府内町跡 第128次調査	15
6. 中世大友府内町跡 今在家町推定地周辺の調査	16
7. 中世大友府内町跡 第133次調査	17
8. 中世大友府内町跡 第134次調査	18
9. 中世大友府内町跡 第135次調査	19
10. 府内城・城下町跡 第27次調査	20
11. 府内城・城下町跡 唐人町推定地の調査	23
12. 古国府遺跡群（羽屋・園遺跡）	24
13. 古国府遺跡群（羽屋・園遺跡）第21次調査	25
14. 東田室遺跡	27
15. 下郡遺跡群	28
16. 羽田遺跡	30
17. 横尾遺跡	32
18. 地蔵原遺跡	33
19. 城原・里遺跡 第20次調査	35
20. 野津原御茶屋跡	38
第3章 受贈図書目録	42

第1章 平成29年度の文化財保護と開発事業の調整

1. 周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲の変更と追加

本市に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、「包蔵地」という）については、平成29年4月17日付で範囲の変更と2箇所追加が大分県教育委員会教育長より通知され、その数は421箇所となった。

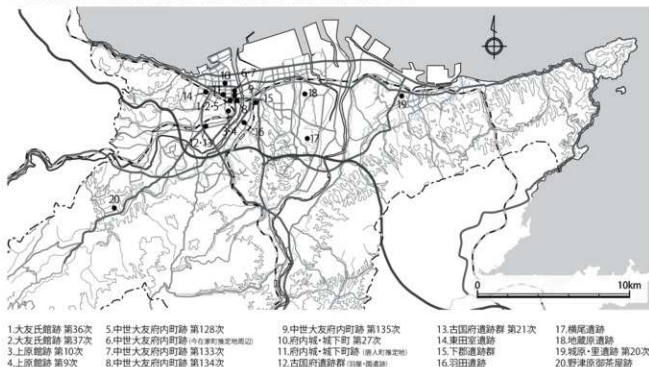
文化財保護法第95条第1項の規定に基づき、本市では包蔵地の資料の整備や周知の徹底を図る目的で遺跡台帳を作成し、教育委員会事務局文化財課の窓口や市HPでの公開に努めている。今回の範囲変更は、過去の調査履歴を基に、現地踏査や古地形復元作業の結果を踏まえて行ったものであり、大分市情報計画の一端として包蔵地の範囲の公開精度を高めるとともに範囲の縮小を図ることになった。

平成29年4月からは、2万5千分の1の地図を使用した範囲の公開から2千5百分の1の精度に変更している。これを受けて、29年度の包蔵地の照会件数は1,795件、文化財保護法第93条の届出及び94条の通知の件数は386件となっている。

また、本書の第2章において詳細を報告する野津原御茶屋跡については、学校建設に伴い試掘調査を行ったところ新たに発見された埋蔵文化財（以下、「遺跡」という）で、平成29年6月7日付で、遺跡台帳に追加登録されている。このため、本市の包蔵地の数は、同年6月7日現在で422件となっている。

2. 調査の件数と場所

このような状況のなか、平成29年度に実施した埋蔵文化財の調査は75件で（第1～3表、第2～5図）、その内訳は、発掘調査8件、範囲確認調査8件、確認調査39件、立会20件となる。



第2図 平成29年度埋蔵文化財発掘調査地点位置図 (1/250000)

発掘調査では開発事業により影響が及ぶ範囲の遺跡の記録作成を行い、範囲確認調査では大友氏館跡や府内城・城下町跡、城原・里遺跡などの遺跡の分布範囲を確認し、確認調査では開発事業による影響を見極める目的で遺跡の分布密度や検出標高などを把握した。また、遺跡への影響が軽微なものについては工事に際し立会をして土層の観察や遺物の回収作業などを行った。

地域別件数では、大分市街地区（地域A）が48件（64%）と、およそ7割を占めており、調査が市街地に集中したことが分かる。

第3図は既往の調査研究成果を基に作成された豊後府内中心部の変遷復元図で、市街中心部に古代から近世にかけての遺跡が広域に分布する。

具体的には、古代大宰府道（豊後道）沿いに飛鳥時代から戦国時代までの遺跡が展開する古国府遺跡群と大友氏館を中心とした4本の南北街道と5本の東西街道で区画された中世大友府内町跡、そして梯郭式の城下町である府内城・城

〔発掘調査〕

No.	発掘番号	遺跡名	調査期間	所在地	地質	調査事由	調査面積	調査担当者	調査内容
1	中世大友府内町跡第123次調査	2017.7.3～2017.7.28	長浜町2丁目	A	道路建設事業（中浜線跡）	150㎡	松浦、東倉	中世大友府内町跡の南北に並ぶ、約50mに亘る調査である。遺跡は16世紀後半～17世紀前半と推定され、中世の大友氏の館跡とみられると推定されている。【参考文献】大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第151巻	
2	中世大友府内町跡第126次調査	2017.5.15～2017.9.2	鶴崎3丁目	A	受託事業（共同住宅建設）	499㎡	小野、留野	中世大友府内町跡の調査で、中世大友府内町跡の調査は、中世大友府内町跡や大友氏館跡とみられると推定されている。【参考文献】大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第154巻	
3	中世大友府内町跡第127次調査	2017.5.15～2017.7.20	金池町5丁目	A	受託事業（共同住宅建設）	265㎡	松浦	中世大友府内町跡の調査で、中世大友府内町跡の調査は、中世大友府内町跡や大友氏館跡とみられると推定されている。【参考文献】大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第152巻	
4	中世大友府内町跡第125・129次調査	2017.7.29～2017.9.28	鶴崎町2丁目	A	受託事業（共同住宅建設）	228㎡	松浦、荒川	中世大友府内町跡の調査で、中世大友府内町跡の調査は、中世大友府内町跡や大友氏館跡とみられると推定されている。【参考文献】大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第153巻	
5	中世大友府内町跡第130次調査	2017.8.25～2017.11.8	長浜町2丁目	A	育成クラブ建設	268㎡	小野	古川町と今の長浜町の境域における調査で、両町を通る西浜線跡と南北道路の交差点付近に存在する古川町の東浜線跡と、両町を結ぶ中浜線跡とを調査する。遺跡は16世紀後半～17世紀前半と推定され、中世の大友氏の館跡とみられると推定されている。【参考文献】大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第156巻	
6	中世大友府内町跡第131次調査	2017.9.25～2017.10.26	長浜町3丁目	A	受託事業（共同住宅建設）	490㎡	小野	古川町に属する以下の調査範囲における調査で、両町を通る西浜線跡と南北道路の交差点付近に存在する古川町の東浜線跡と、両町を結ぶ中浜線跡とを調査する。遺跡は16世紀後半～17世紀前半と推定され、中世の大友氏の館跡とみられると推定されている。【参考文献】大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第157巻	
7	中世大友府内町跡第132次調査	2017.11.6～2017.12.2	金池町5丁目	A	受託事業（共同住宅建設）	205㎡	松浦	新町町定跡の南側に並ぶ調査で、16世紀後半の南北方向の土壌埋積2層とそれに平行する土壌埋積が確認された。【参考文献】大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第158巻	
8	城原・里遺跡第1次調査	2017.10.6～2017.11.16	城原	G	受託事業（教育施設）	372㎡	小野	14世紀前半～15世紀前半の遺跡と推定された。【参考文献】大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第159巻	

〔範囲確認調査〕

No.	発掘番号	遺跡名	調査期間	所在地	地質	調査事由	調査面積	調査担当者	調査内容
1	大友氏館跡第36次調査 (中心部)	2017.4.21～ 2017.12.18	鶴崎町3丁目	A	大友氏遺跡事業	2700㎡	五十川	中世大友府内町の範囲とその事業範囲外の遺構や状況の把握を目的とした調査で、中心部建物跡の範囲をより詳しく、その裏手にある東方向の土塁跡などを追加した。本書第2章で詳細を報告。	
2	大友氏館跡第37次調査 (中心部西側)	2018.2.8～ 2018.3.20	鶴崎町3丁目	A	大友氏遺跡事業	750㎡	五十川	16世紀後半の中世大友府内町の西側の遺構分布状況の把握を目的とした調査で、16世紀後半の中心部を多く含む聖地土塁が確認された。本書第2章で詳細を報告。	
3	上野原跡第16次調査	2017.10.3～ 2017.10.10	上野原西	A	重要遺跡確認調査	49㎡	小野、留野	上野原跡周辺の中世や古戦に関する調査で、遺構土塁の可能性のある古代の遺構や惣領とその時代から古のビュートなどの遺構が確認された。本書第2章で詳細を報告。	
4	府内城・里遺跡第20次調査	2018.2.15～ 2018.3.16	大分市城原	G	重要遺跡確認調査	220㎡	小野	8世紀前半の盛土聖地土塁と、8世紀前後が確認されている。本書第2章で詳細を報告。	
5	10府内城・城下町跡 第27次調査（手掘調査）	2017.5.2～ 2017.9.8	鶴崎町4丁目	A	城址公園整備	730㎡	小野	本丸及び堀之丸聖地における遺構分布状況を確認する調査で、本丸の取付柱と遺構の石垣や断片、礎石、内方壁など石の遺構が確認された。本書第2章で詳細を報告。	
6	府内城・城下町跡 第28次調査	2017.8.16～ 2017.9.8	鶴崎町3丁目	A	花壇小学校跡地整備	1000㎡ (全体5300㎡)	松浦	市内城址之丸聖地における調査で、築土築石の遺構や土塁と考えられる石や石垣下遺跡、排水路跡などの遺構が確認されている。調査は平成31年度に終了予定である。	
7	11府内城・城下町跡	2018.3.12～ 2018.3.30	府内町1丁目	A	花壇公園整備	167㎡	小野	遺人の堀之丸聖地の調査で、江戸時代の中世大友氏聖地の遺構が確認されている。本書の第2章で詳細を報告。	
8	20野津原跡第1次調査	2017.9.6～ 2017.9.8	野津原	H	学校建設	20㎡	松浦	野津原跡小学校跡・野津原小学校における試掘調査により新たに発見された遺跡で、野津原跡周辺の範囲が確認されている。本書の第2章で詳細を報告。	

第1表 平成29年度埋蔵文化財調査一覧表①

〔確認調査〕

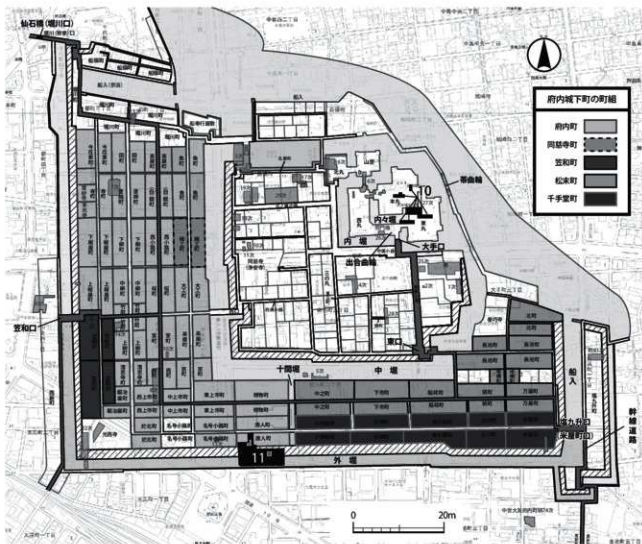
No.	調査番号	遺跡名	調査日	大字・町名	地域	工事目的	事業種別	調査面積	調査結果	調査担当者	措置
1	17	横尾遺跡	平成29年4月18日	大字横尾	E	宅地造成	民間開発	45.9㎡	遺跡なし	小野	工事施工
2		五沢地区集落跡	平成29年4月19日～21日	大字上芳方	B	老人ホーム	民間開発	250㎡	遺跡あり	小野、笠野、荒川、大塚、荒木	工事施工
3		中世大友府内町跡	平成29年4月27日～5月10日	長浜町 3丁目	A	集合住宅	民間開発	45.34㎡	遺跡あり	松浦、荒川、荒木、大塚	発掘調査
4	14	栗田遺跡	平成29年4月27日～5月10日	田辺町	A	集合住宅	民間開発	9.72㎡	遺跡あり	松浦、荒川	工事施工
5	5	中世大友府内町跡第13次調査	平成29年4月29日～5月31日	鶴巻町 2丁目	A	集合住宅	民間開発	15㎡	遺跡あり	松浦、荒川、佐藤、大塚	工事時立会
6		中世大友府内町跡	平成29年5月16日	金谷町 5丁目	A	集合住宅	民間開発	13.65㎡	遺跡あり	小野、佐藤、米倉	工事施工
7	4	上原町跡 第9次調査	平成29年4月8日	上野野	A	集合住宅	民間開発	40.94㎡	遺跡なし	小野、佐藤、米倉	工事施工
8	20	野津原跡集落跡	平成29年5月23日～24日	野津原	H	公園開設	公共事業	62.67㎡	遺跡あり	松浦、荒木、米倉	工事施工
9	12	羽屋・園遺跡	平成29年4月14日	大字羽屋	A	宅地造成	民間開発	23.69㎡	遺跡あり	松浦、荒木、米倉	工事施工
10		堀地区集落跡	平成29年4月15日	大字堀	G	川口改修	公共事業	5.5㎡	遺跡なし	松浦、大塚	工事施工
11		比濃跡	平成29年4月28日	大字吉野原	C	宅地造成	民間開発	10.64㎡	遺跡なし	松浦、笠野	工事施工
12	15	下郡遺跡	平成29年7月26日	下郡北 3丁目	A	集合住宅	民間開発	100㎡	遺跡あり	小野	工事施工
13	5	中世大友府内町跡第12次調査	平成29年7月19日～9月19日	鶴巻町 2丁目	A	集合住宅	民間開発	170㎡	遺跡あり	松浦、荒川	工事施工
14		上野遺跡	平成29年4月17日	大字上野	A	道路	公共事業	164.31㎡	遺跡あり	松浦	工事施工
15		下郡遺跡	平成29年4月28日	下郡南	A	その他建物（事務所）	民間開発	32㎡	遺跡あり	松浦	工事施工
16		志呂町遺跡群	平成29年9月13日	大字志呂	A	保育園増築	民間開発	11.76㎡	遺跡あり	松浦、荒川	工事施工
17		坂ノ上遺跡	平成29年9月31日	坂ノ市中央 5丁目	G	個人住宅増築	民間開発	12㎡	遺跡なし	小野	工事施工
18		佐藤遺跡	平成29年9月14日	中戸芝	C	集合住宅	民間開発	32.8㎡	遺跡なし	小野、佐藤	工事施工
19	18	地蔵原遺跡	平成29年9月13日	大字小浜原	E	集合住宅	民間開発	16.5㎡	遺跡あり	池邊	工事施工
20		五沢地区集落跡	平成29年10月18日	大字木ノ上	B	集合住宅	民間開発	11.76㎡	遺跡なし	松浦、佐藤	工事施工
21		千歳城跡	平成29年9月27日	大字千歳	E	宅地造成	民間開発	12.8㎡	遺跡あり	小野	工事施工
22	6	中世大友府内町跡	平成29年9月26日	長浜町 3丁目	A	個人住宅	民間開発	21.8㎡	遺跡なし	小野	工事施工
23	13	志呂町遺跡群第1次調査	平成29年10月25日～26日	大字志呂	A	宅地造成	民間開発	55.4㎡	遺跡あり	松浦、米倉、荒川	工事施工
24		志呂町遺跡群	平成29年10月26日	大字志呂	A	専用住宅	民間開発	2.824㎡	遺跡あり	松浦、笠野、米倉、荒川	工事施工
25		中尾遺跡・中尾古墳 2号墳	平成29年10月31日	大字中尾	A	送配電路塔	民間開発	102㎡	遺跡なし	松浦	工事施工
26	16	羽田遺跡	平成29年11月2日	大字羽田	A	その他建物（事務所）	民間開発	23.4㎡	遺跡あり	松浦、笠野、米倉	工事施工
27		野田遺跡	平成29年11月8日	大字野田	A	その他建物（店舗）	民間開発	52.6㎡	遺跡なし	松浦、笠野、荒木、米倉	工事施工
28		真置遺跡	平成29年11月28日	大字松岡	E	福祉施設	民間開発	10㎡	遺跡なし	小野、荒川	工事施工
29	7	中世大友府内町跡第13次調査	平成29年12月8日	長浜町 3丁目	A	専用住宅	民間開発	6.68㎡	遺跡あり	松浦、荒木、米倉	工事施工
30		上野遺跡	平成29年12月12日	元町	A	宅地造成	民間開発	60㎡	遺跡なし	小野	工事施工
31		金谷古墳	平成29年12月14日	金谷谷	A	公園開設	民間開発	9.7㎡	遺跡なし	松浦	現状保存
32		城原・通跡	平成30年1月16日	大字城原	G	集合住宅	民間開発	11.25㎡	遺跡なし	小野、荒川	工事施工
33		鶴巻町遺跡群	平成30年2月2日	大字鶴巻	E	宅地造成	民間開発	12.9㎡	遺跡なし	笠野、米倉	工事施工
34		五沢地区集落跡	平成30年2月8日	大字上芳方	B	集合住宅	民間開発	18㎡	遺跡あり	五十川、佐藤、荒川	工事施工
35		今市塚跡・石巻跡	平成30年3月19日	大字今市	H	排水施設	公共事業	6㎡	遺跡への影響なし	池邊、松浦	工事施工
36		城原・星遺跡	平成30年2月15日～3月20日	大字城原	G	公園開設	公共事業	271㎡	遺跡あり	小野	現状保存
37	8	中世大友府内町跡第14次調査	平成30年3月22日	鶴町 3丁目	A	専用住宅	民間開発	13.4㎡	遺跡あり	池邊、笠野	工事施工
38	9	中世大友府内町跡第15次調査	平成30年3月27日～29日	鶴町 1丁目	A	専用住宅	民間開発	40㎡	遺跡あり	松浦、荒川	工事施工
39		鎌方・後遺跡	平成30年3月22日	大字鎌方	B	集合住宅	民間開発	6㎡	遺跡なし	五十川、荒木	工事施工

第2表 平成29年度埋蔵文化財調査一覧表②

下町跡の3つの遺跡が所在する。その中でも中世大友府内町跡や府内城・城下町跡については町の復原想定図が第4・5図のとおり作成されており、その信憑性は高く、当該地一帯の調査結果がそれを裏付けている。

平成29年度の調査では、府内城の内々堀をはじめ中世大友府内町の今在家町や名ヶ小路の道路推定地において確認調査を実施しており、堀跡や石垣そして道路状遺構などが検出されている。

以上の成果を報告するため、次章では中世大友府内町跡や府内城・城下町跡の町の比定地が復元されている地点での確認調査の成果を中心に、平成29年度の埋蔵文化財の調査概要についてまとめる。（堀地）



第4図 府内城・城下町跡調査地点位置図 (1/8000)

3. 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 三浦享二

調査体制

【平成29年度（調査時）】

文化財課

課長 沖田 光宏

参事 坪根 伸也

参事 栗田 博之

参事兼大分市歴史資料館館長 武富 雅宣

埋蔵文化財担当班

参事（グループリーダー） 池邊千太郎

主査 五十川雄也

主任 松浦 憲治

主事 小野 綾夏

嘱託職員 佐藤 里恵

嘱託職員 留野 優兵

嘱託職員 米倉加奈絵

嘱託職員 荒木 伴世

嘱託職員 大塚 奈歩

嘱託職員 荒川 和哉

【平成30年度（報告書作成時）】

文化財課

課長 沖田 光宏

政策監 坪根 伸也

参事 栗田 博之

参事兼大分市歴史資料館館長 武富 雅宣

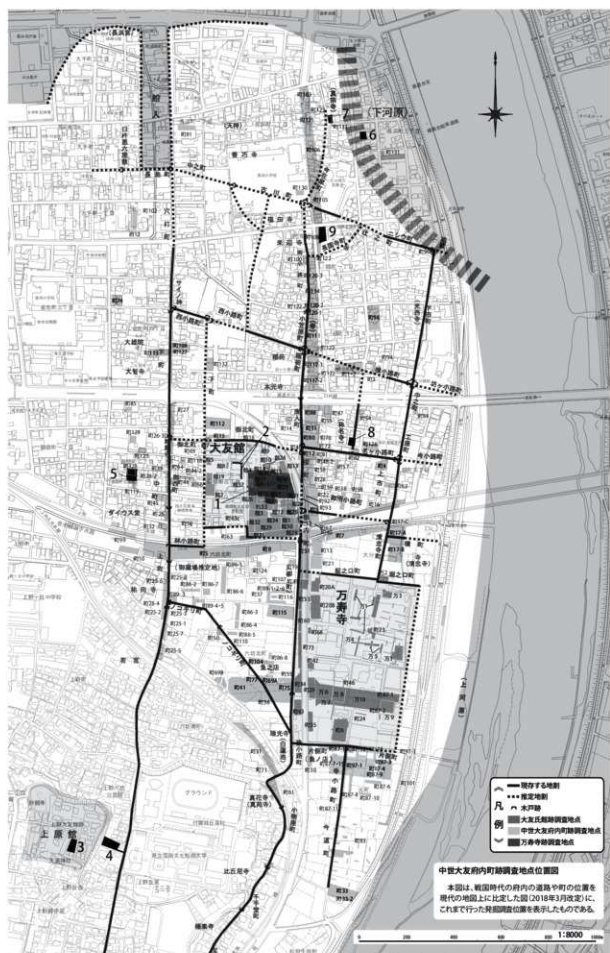
学芸調査担当班

参事（グループリーダー） 植木 和美

参事補 塩地 潤一（報告書作成担当）

嘱託職員 米倉加奈絵（報告書作成担当）

嘱託職員 荒木 伴世（報告書作成担当）



第5図 中世大友府内町復元想定図(1/8000)

第2章 埋蔵文化財の調査概要報告

1 大友氏館跡 第36次調査

調査面積 約4900㎡ 調査期間 H29.5.9～12.15 地域 A 調査担当 五十川

1. 調査の概要

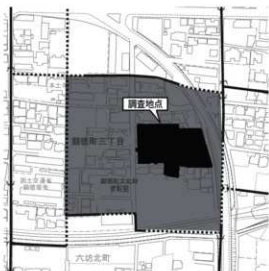
今回の調査は、16世紀後半頃の中心建物跡の構造確認とその東側の遺構分布状況の確認を調査の目的として実施したものである。

調査の結果、中心建物跡の詳細構造や、その東側には中心建物跡を南北に区画する溝や砂利敷きの空間、礎石建物跡、柱穴列等が検出された。

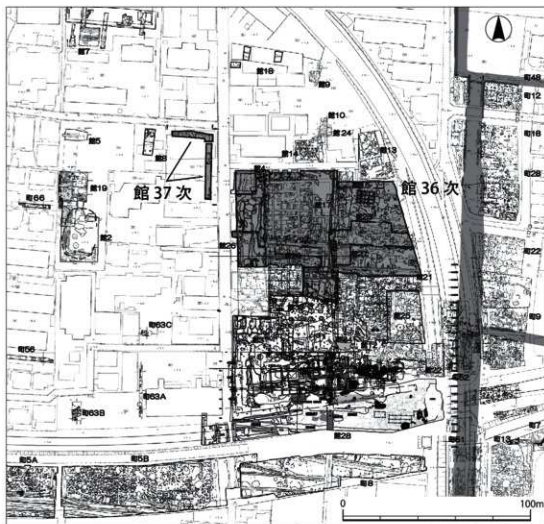
中心建物跡 (36SB300・400)

南北2棟の建物で構成され、その主軸は東側に4°振れることが明らかとなった。2つの建物は東側の面を揃えて建てられており、建物の柱間については、礎石痕の並びから1間6尺5寸の間隔と考えられる。

中心建物の南側建物跡(36SB300)は南北6.5間×東西5.5～6.5間の建物跡に広縁が四方に廻るような柱の配列に復元される



第6図 調査地点位置図 (1/5000)



第7図 大友氏館第36・37次調査区位置図 (1/2000)

ものである。また北側建物跡（36SB400）については南北4間×東西3間の規模と判断される。

礎石建物跡（36SB145）

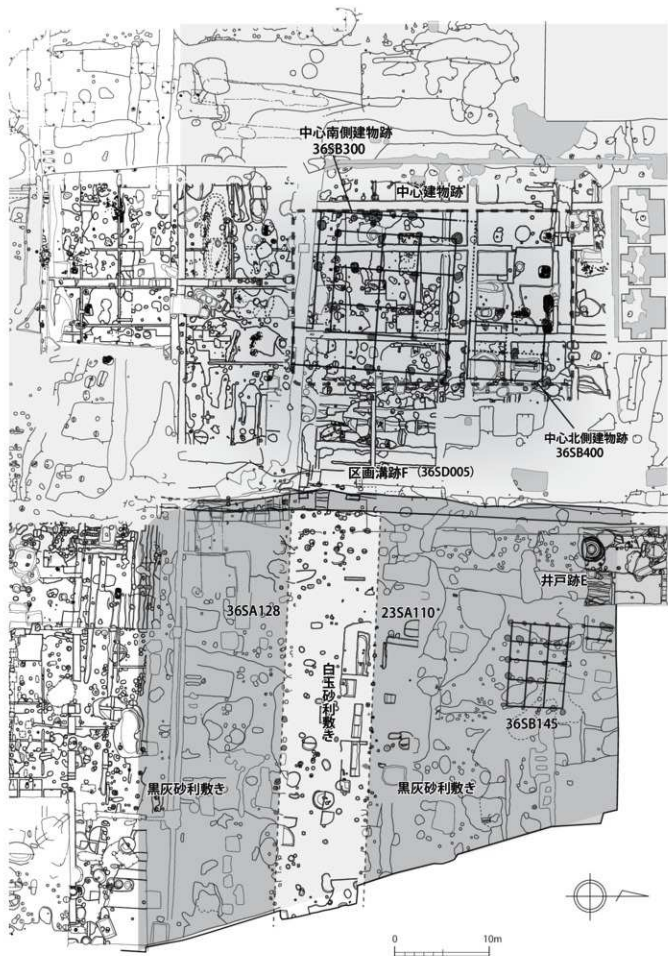
中心建物跡の北東側に検出された16世紀の遺構である。礎石は南北の1列のみ残存しており、そのほかは抜き取られている状態で検出された。規模は南北3間（約6m）×東西4.5間（約4.5m）ほどで、東西列の東側の柱間間隔が他よりも0.5間長くなっており、また南北列西側の礎石が残存している列は6mを細かく5つに割っている。建物主軸は真北から東側に4°振っている。礎石の上面レベルで約4.7mである。

区画溝（36SD025）

中心建物跡の東側に検出された16世紀の南北溝で、調査時の平面検出及び断面観察から、最低3回ほどの掘り返しが確認された。一番新しい溝の規模は、長さ約45m、幅約1m、深さ約0.5mを測り、中心建物とその東側の空間を区画する南北溝と判断されるものである。



第8図 大友氏館第36次周辺遺構配置図（1/400）



第9図 中心建物東側の遺構復元配置図 (1/400)

砂利敷き遺構及び柱穴列 (23SA110・36SA128)

36SD025の東側では、部分的ではあるが、密度の濃い砂利敷きの状況が検出された。そのほとんどは黒色・灰色の砂利で敷かれている。また東西方向に約3m間隔を基本とする柱穴列が2条検出された(23SA110・36SA128)。23SA110と36SA128の間は約9mで、この間は近世以降の削平が周辺より深く、白玉砂利が敷かれた状況では検出できなかった。しかしこの柱穴列間の間で、検出された16世紀、17世紀の遺構からは白色の玉砂利が多く出土しており、この周辺は白玉砂利敷きの可能性が高いと考えられる。

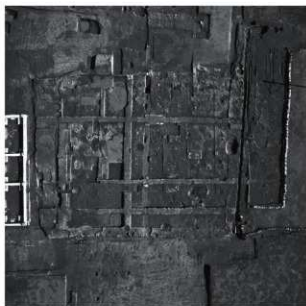
今回の調査により大友氏館の中心建物跡の東側の状況が、かなり明確になってきたものと言える。具体的には、中心建物跡と推定大門との間の空間には黒灰砂利敷きの空間や推定白玉砂利敷きの空間、また礎石建物跡や南北に区画する溝跡が明らかとなった。

今回設定した調査区の東側には、古絵図に描かれた大門が所在するものと考えられているが、その確認作業は次の課題である。館東側の外郭施設である築地の比定地もすでに検証されており、大門の位置については、今回の調査成果である推定白玉砂利敷きの空間などと関連があるとすれば、今後の解決に向けて、大きく前進したといえる。

(五十川)



調査区全景



中心建物域全景



36SB145検出状況 (北西から)



36次北側 黒・灰色砂利敷き遺構 (南から)

2 大友氏館跡 第37次調査

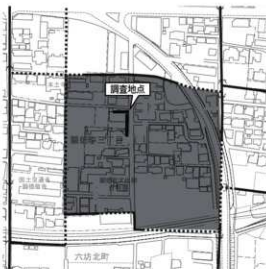
調査面積 約750㎡ 調査期間 H30.2.15～3.19 地域 A 調査担当 五十川

1. 調査の概要

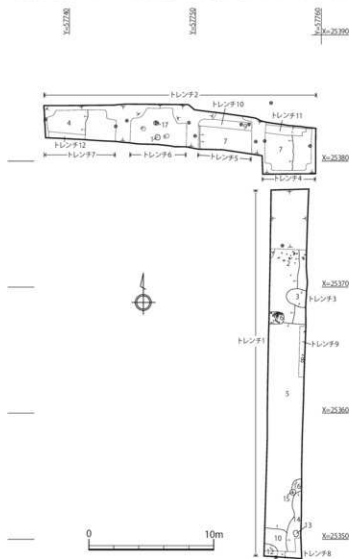
今回の調査は、16世紀後半頃の中心建物域の西限確認を調査の目的として実施したものである。調査地は中心建物跡から西側へ約30mの地点にあたる。

調査の結果、16世紀後半頃の砂利を多く含む整地土層（S-5）が標高約4.1mで確認された。今回調査区のS5検出面は砂利の検出状況から当時の地表面に近い状況を示していると推定され、中心建物跡の検出標高約5.1mよりは1m以上は低くなると考えられる。またかわらけの一括廃棄土坑などが検出されていないことから、今回の調査地点までは中心建物域が広がる可能性は低いと考えられる。

また第11図S-2・7は埋土の状況から同一遺構と考えられ、トレンチ10・11の観察によると、幅7.5m、検出面からの深さ2mを呈する南北方向の溝跡と考えられ、溝底から15世紀後葉～16世紀前葉のロクロ目土師器がほぼ完形で2個体出土した。この溝跡と時期・形態が類似する遺構として、館19SX100（第7図）が西側で検出されており、関連する遺構と考えられる。（五十川）



第10図 調査地点位置図 (1/5000)



第11図 1トレ・2トレ位置図 (平面図) (1/300)



調査区全景



トレンチ10南壁土層 (北西から)

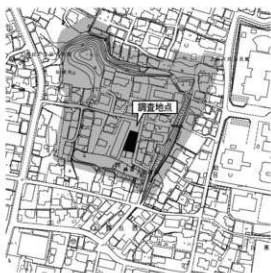
3 上原館跡 第10次調査

調査面積 約49㎡ 調査期間 H29.10.3～10.10 地域 A 調査担当 小野・留野

1. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴い行った確認調査である。調査地点は、上原館推定地の中央やや南側に位置するため、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的として実施したものである。平成28年度には、第8次調査として今回の調査区の北側に隣接して調査を行っており、古代の土師器片を含む暗茶褐色土の整地層やビットなどの遺構、中世の京都系土師器などの遺物が確認された（埋蔵文化財調査概要報告2017）。確認調査は、南北に7m、東西に7mの調査区を設定し、現地表面から遺構が確認できる約0.5m下までを重機による掘削を行った。

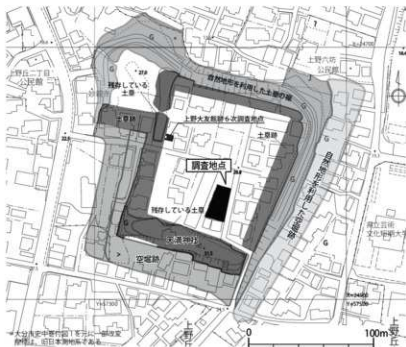
調査の結果、調査区の3分の1程度が近現代のカクランにより影響を受けているが、標高約28.5m地点で暗茶黒色土層を検出した。暗茶黒色土層は、表土下約0.5m地点に堆積する遺物包含層で、古代の土師器の破片を多く含むものである。その上位において遺構検出作業を行ったものの、調査区内に遺構は確認されなかった。さらに調査区の南側と東側に一部サブトレンチを設定し、暗茶黒色土を取り除くと、下位には黄褐色粘質土の安定地盤が見られ、その上面においてビットなどの遺構が検出された。



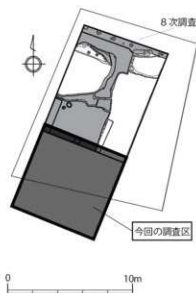
第12図 調査地点位置図 (1/5000)

2. まとめ

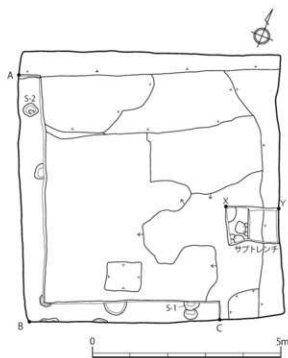
今回の調査では、上原館を構成する明確な遺構を確認することはできなかった。しかしながら、上原館が存在した時期である中世については、調査区の北側で京都系土師器片が出土していることから周辺部に遺構や遺物が残存している可能性が高い。そのため、上原館内部では今後も中世の遺構を確認するための調査を継続して行っていく必要があると考えられる。（小野）



第13図 上原館跡範囲図 (1/3000)



第14図 トレンチ位置図 (1/300)



1. 2016年度調査トレンチ
2. 表土からの検出。コンクリート片、径3～5cmの礫を含有
3. 表土。茶褐色土に径20cm大の礫、草根、コンクリート片が埋まる
4. 茶灰色土。しみが悪い。土器細片を含むが炭化物粒は含まない
5. 暗灰褐色粘質土。粘性あり。土器細片、炭化物粒を含有。しみがいい
6. 茶灰色土。遺物包含層。しみがよく、径5mm大の炭化物粒、土器細片などを含む。西壁の6層。
7. 黄褐色粘質土。自然堆積層、西壁の6層。



1. 表土。茶褐色土にコンクリート片、草根、径2cm大の礫が埋まる
2. 灰褐色土。数分含有。しみがよく、粘性有り
3. 茶灰色土。しみが悪い。土器細片を含むが炭化物粒は含まない
4. 茶褐色粘質土。炭化物土、土器細片、黄褐色土ブロックを含有。しみがいい
5. 茶灰色土。遺物包含層。しみがよく、径5mm大の炭化物粒、土器細片などを含む。西壁の6層。
6. 黄褐色粘質土。自然堆積層、西壁の7層。

サブトレント土層模式 29.0m



1. カクラン
2. 灰褐色土。遺物包含層土
3. 暗灰褐色土。遺構埋土
4. 暗灰褐色土。遺構埋土
5. 黄褐色粘質土。地山

■ 暗茶黒色土(堅地もしくは遺物包含層)

第15図 平面図・土層図 (1/100)



調査区全景 (南より)



西壁土層 (東より)



第2面遺構検出状況 (東より)



第2面遺構検出状況 (北より)

4 上原館跡 第9次調査

調査面積 約49㎡ 調査期間 H29.6.8 地域 A 調査担当 小野・佐藤・米倉

1. 調査の概要

今回の調査は、集合住宅建設に伴い行った確認調査である。調査地は上原館の自然地形を利用した空堀の推定地で、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的として実施したものである。

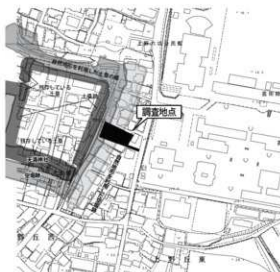
調査対象地に4箇所の調査区を設定して確認調査を行った結果、館側から東側に向けて深くなる自然地形を確認した。地形の落ちは1トレンチと4トレンチで認められ、1トレンチでは表土下約0.5m、4トレンチでは約0.9m地点で検出される。地形の落ちには暗茶黒色土（自然堆積土）が堆積しており、その深さは最大で約1.0mを測る。土層観察の結果、人為的な掘削や埋め戻しの痕跡は認められない。出土遺物は皆無である。

また、自然堆積土層の上下で遺構検出作業を行ったところ、遺構も確認できなかった。

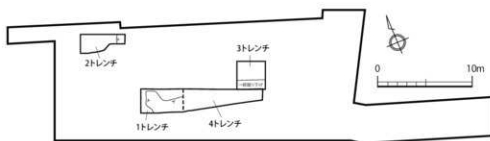
以上のことから、当該地の落ちは自然地形と考えられ、館の東辺に平行する谷地形であることを踏まえれば、空堀として十分に機能していたものと判断される。

2. まとめ

以上のことから、当該地の落ちは自然地形と考えられ、館の東辺に平行する谷地形であることを踏まえれば、空堀として十分に機能していたものと判断される。（小野）



第16図 調査地点位置図 (1/5000)



第17図 トレンチ位置図 (1/400)



第18図 土層模式図



2トレンチ検出状況 (東より)



4トレンチ北壁土層 (南より)

5 中世大友府内町跡 第128次調査

調査面積 約29㎡ 調査期間 H29.5.29～5.31・8.1 地域 A 調査担当 松浦・荒川

1. 調査の概要

今回の調査は、専用住宅兼集合住宅建設に伴い行った確認調査である。調査地はコレジオの推定地にあたり、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的として実施したものである。

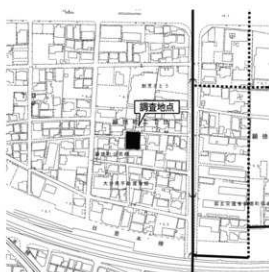
調査の結果、表土下約1.1m地点で溝状遺構(SD005)やビットなどが検出された。遺構検出面は1面で、整地土層は確認されていない。溝状遺構(SD005)の幅は約1.1m、深さは約0.5mで、南西方向から北東方向に伸びる。遺物は土師器の破片が出土しており、その所属年代から15世紀代に埋没したものと判断されるものである。その他遺構の出土遺物についても僅少で、15世紀～16世紀前半代の土師器の破片が僅かに認められるものの、古代・中世前半期の遺物がその大半を占める。

2. まとめ

今回の調査では、コレジオが建っていたと推定されている16世紀後半代の遺構は確認できず、それより古い15世紀代の溝状遺構など、16世紀前半以前の遺構、遺物が展開していることが判明した。今回の調査区の東側の第4南北街路沿いには16世紀後半に町屋が展開していたと考えられるが、その町屋の裏手の推定コレジオ跡周辺については、南側隣接地の調査(町119次)でも当該期の遺構は確認できておらず、様相は不明である。今後、コレジオの位置比定の問題も含めて、周辺様相の把握が必要である。

なお、建物基礎の埋設工事に伴い、掘削される範囲に3箇所のトレンチを設定しての工事を平成29年8月1日に行ったところ、遺構検出面まで埋設工事の掘削が及ばないことを確認した。

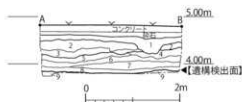
(松浦)



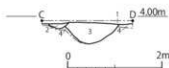
第19図 調査地点位置図 (1/5000)



第20図 トレンチ配置図 (1/800)

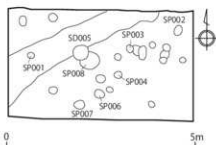


1. 黒褐色シルトと暗褐色シルトの混在 砂礫(～細礫) 礫(径1～3cm) 含 炭粒・焼土粒少量
2. 黒褐色砂礫(～細礫) 混シルト 礫(径1～3cm) 含 炭粒・焼土粒少量
3. 暗褐色砂礫シルト 礫(～径3cm) 含 炭粒・焼土粒(～径2cm) 含
4. 灰黄色砂礫シルト 礫(～径3cm) 少量 暗褐色砂礫シルトブロックとの混在
5. 灰黄色砂礫シルト 礫(～径3cm) 少量 6. より砂がちでしる
6. 灰黄色砂礫シルト 礫(～径1cm) 少量 炭粒少量 7. より砂がちでしる
7. 灰黄色砂礫シルト 礫(～径5mm) 少量
8. 暗褐色砂礫シルト 細礫少量 9. より砂がち
9. 暗褐色砂礫シルト 細礫わずかに 含 8. より砂がち

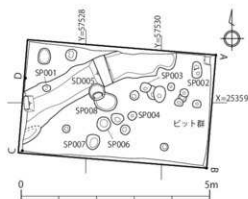


1. 暗褐色砂礫シルト 細礫少量 4. より砂がち
2. 暗褐色砂礫シルト 細礫含 ビット埋土
3. 暗褐色砂礫土質シルト 細礫少量
4. のブロック(～径5cm) 含 炭粒・焼土粒少量 SD005 埋土
4. 暗褐色砂礫シルト 礫(～径5mm) わずかに 含 1. より砂がち

第23図 土層図 (1/80)



第24図 遺構配置図 (1/100)



第25図 全体遺構図 (1/100)

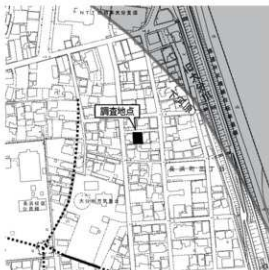
6 中世大友府内町跡 今在家町推定地周辺の調査

調査面積 約22㎡ 調査期間 H29.9.26 地域 A 調査担当 小野・留野

1. 調査の概要

今回の調査は、専用住宅建設に伴い行った確認調査である。調査地点は、中世のまちを描いた『府内古図』の「今在家町」の推定地周辺にあたり、その東側は「下河原」に相当するため、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を調査の目的として実施したものである。周辺では、平成29年度に中世大友府内町跡第131次調査（第157集「大友府内31」）を行っており、旧河道による堆積層とその上面には近世に行われた整地層が確認されている。

調査の結果、表土下約0.3～0.6m地点で砂利を多く含む灰色粗砂層が検出された。遺構・遺物は皆無である。灰色粗砂層の検出深度は東側に向かって深くなっており、当該地の東側には大分川が北流していることから、この粗砂層は大分川の氾濫原堆積物である可能性が指摘される。



第24図 調査地点位置図 (1/5000)

2. まとめ

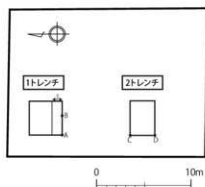
以上のことから、『府内古図』の「下河原」地点は、粗い砂層などの河川による堆積層が広がっており、中世大友府内町の中でも河原のような場所であったことが推定される。(小野)



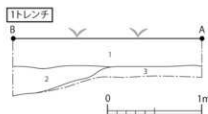
1トレンチ検出状況 (東より)



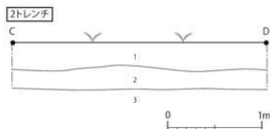
1トレンチ南壁土層 (北より)



第25図 トレンチ位置図 (1/400)



- 1. 現表土 草根 砂れき混じり
- 2. 暗褐色シルト質土 (精作土)
- 3. 灰色粗砂 こぶし大のれき混じり 2トレの2層と同じ



- 1. 明茶色土 (現表土) 草根や砂礫が混じる
- 2. 暗褐色シルト質土 (精作土)
- 3. 灰色粗砂 こぶし大のれきが混じり 2トレの2層と同じ

第26図 土層模式図 (1/40)

7 中世大友府内町跡 第133次調査

調査面積 約7㎡

調査期間 H29.12.8

地域 A

調査担当 松浦・荒木・米倉

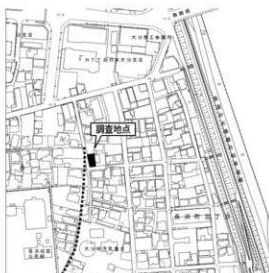
1. 調査の概要

今回の調査は、専用住宅建設に伴い行った確認調査である。調査地は今在家町の道路推定地の東側隣接地に相当するため、道路状遺構及びそれに隣接する遺構の検出を主たる調査の目的として実施したものである。

調査の結果、表土下約0.4m地点で南北方向の道路状遺構(S-1)が検出された。道路状遺構(S-1)は今在家町を通る南北道路の一部で、溝状の掘り込みに固く締まる粗砂層や砂利が多く含まれた褐色粘質土を交互に敷設し、道路基盤や道路面としたものである。道路基盤土内から京都系土師器皿や白磁・青磁の破片が出土しており、その帰属年代から16世紀代の遺構と判断される。

2. まとめ

今回の調査では、今在家町にのびる南北道路の東端を確認した。これまでは西側に隣接する現道路に南北道路が推定されており、今回の調査の結果でおおむねその位置に通ることが判明した。道路幅は判明できなかったが、南側での町105次調査でこの南北道路の幅約4mと確認されており、同様の道路幅であれば現道路の中ほどに西端が位置すると推定される。(松浦)



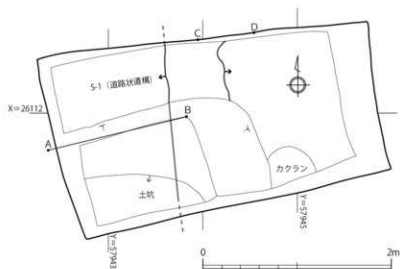
第27図 調査地点位置図 (1/5000)



北壁土層 (南より)



第28図 トレンチ位置図 (1/300)



第29図 平面図・土層図 (1/40)

調査区 北壁土層

- C 1. バラス、表土
- D 2. 褐色粘質土 (炭化物、黄色ブロック多量含む) ~道路状遺構埋土
- 3. 灰褐色粘質土 (黄色ブロック中量含む)

1 トレンチ 北壁土層

現在の道路 4.30m

4.00m

- 1. 褐色粘質土 (砂利を多く含む、やや固くしめる) ~道路状遺構埋土
- 2. 灰褐色粘質土 (黄色ブロック中量含む)
- 3. 褐色細砂 (自然堆積層) (地山)

8 中世大友府内町跡 第134次調査

調査面積 約13㎡ 調査期間 H30.2.22 地域 A 調査担当 池邊・留野

1. 調査の概要

今回の調査は、専用住宅建設に伴い行った確認調査である。調査地は名ヶ小路町から北に伸びる南北道路の推定地であり、道路状遺構の検出を主たる調査の目的として実施したものである。

調査の結果、表土下約0.9m地点で溝状遺構（S-1・2）や石列、整地土層やピットが検出された。出土遺物の帰属年代から16世紀代の遺構群と判断されるものである。

溝状遺構（S-1）は道路推定地で確認された南北溝で、道路状遺構の掘り方もしくは道路側溝である可能性が高い。また、石列は溝状遺構（S-1）が埋没した後に溝西側に沿って並ぶもので、当該地の同時期の道路状遺構にも事例が見受けられることから、溝状遺構（S-1）が道路状遺構の一部である可能性を示唆するものと言える。

なお、この整地土層の下位からも南北方向の溝状遺構（S-2）が検出されており、遺構は整地土層の上下に存在しているものと判断される。

2. まとめ

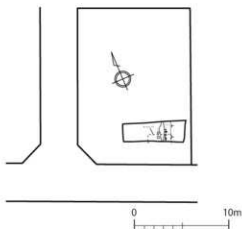
この確認調査では路面自体は検出されなかったものの溝状遺構が確認された事から南北道路の存在を裏付ける発見となった。（池邊）



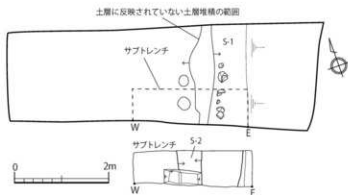
第30図 調査地点位置図 (1/5000)



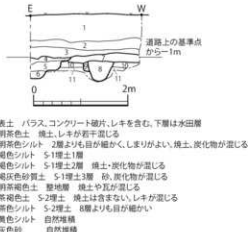
石列近景 (北より)



第31図 トレンチ位置図 (1/400)



第32図 平面図・土層図 (1/80)



1. 表土 バラス、コンクリート破片、レキを含む。下層は水田層
2. 明茶色シルト 焼土、レキが若干混入
3. 明茶色シルト 2層よりも目が細かく、しまりがよい。焼土、炭化物が混入
4. 褐色シルト S-1増土1層
5. 褐色シルト S-1増土2層 焼土、炭化物が混入
6. 褐色シルト S-1増土3層 砂、炭化物が混入
7. 明茶色土 整地層 焼土や瓦が混入
8. 茶褐色土 S-2増土 焼土は含まない。レキが混入
9. 茶褐色土 S-2増土 6層よりも目が細かい
10. 黄色シルト 自然堆積
11. 灰色砂 自然堆積

9 中世大友府内町跡 第135次調査

調査面積 40㎡ 調査期間 H30.3.27 ~ 3.29 地域 A 調査担当 松浦・荒川

1. 調査の概要

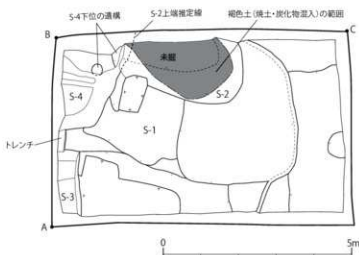
今回の調査は専用住宅建設に伴い、長国寺町と南小路町の裏手付近において、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的に実施した。調査の結果、表土下約0.7m（標高約3.8m）で溝状遺構や大型の土坑などが重複して検出された。大型の土坑群は廃棄土坑と考えられ、溝状遺構は施設を区画する溝と考えられる。遺構から京都系土師器皿や備前焼の甕、鉢などが出土しており、16世紀後半頃の遺構群であると考えられる。また、調査区の土層観察からは、2時期の整地層（第35図23 ~ 25層と28 ~ 30層）が確認でき、隣接する町109次の調査成果を踏まえれば、3面の遺構検出面があるものと考えられる。

2. まとめ

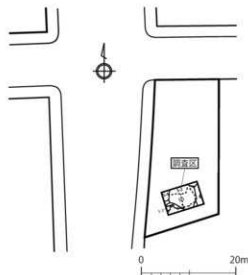
周辺は、隣接地の調査結果から屋敷地が展開していたと考えられており、今回も同様に廃棄土坑や区画溝と、3面の遺構面を確認できることから、同じく屋敷地の一部であると考えられ、より東側に屋敷地が展開していたものと想定される。（松浦）



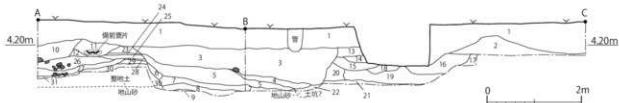
第33図 調査地点位置図 (1/5000)



第35図 平面図 (1/100)



第34図 トレンチ位置図 (1/800)



- | | | |
|---------------------------------|-------------------------|----------------------------|
| 1. 表土 現代土 | 11. 暗褐色粘質土 (S-5埋土) | 21. 暗褐色粘質土 (灰・焼土片多く含む) |
| 2. 近現代土 | 12. 灰黒色粘質土 (灰・焼土含む) | 22. 明黒灰色粘質土 (灰・焼土少し含む) |
| 3. 褐茶黄色粘質土 (灰・焼土・小礫(10cmほど)を含む) | 13. 黄褐色粘質土 | 23. 暗黄褐色粘質土 |
| 4. 暗灰褐色粘質土 (灰・焼土片多く含む) | 14. 褐色粘質土 (黄色ブロック含む) | 24. 明黄褐色粘質土 (しまり強い) |
| 5. 暗褐色粘砂質土 | 15. 褐茶黄色粘質土 (黄色土ブロック含む) | 25. 暗黄褐色粘質土 |
| 6. 暗褐色粘質土 | 16. 褐茶黄色粘質土 (黄色土ブロック含む) | 26. 暗黄褐色粘質土 (灰含む・小礫集中箇所あり) |
| 7. 暗褐色粘質土 (砂を多く含む) | 17. 暗褐色粘質土 | 27. 暗黄褐色粘質土 (灰少量・小礫含む) |
| 8. 灰茶黄色土 (砂を多く含む) | 18. 暗褐色粘質土 | 28. 暗灰褐色粘質土 |
| 9. 茶褐色土 | 19. 灰黄色砂 | 29. 明黄褐色粘質土 |
| 10. 暗黄褐色粘質土 (黄色土ブロック少量含む) | 20. 暗黄褐色粘質土 (灰少量含む) | 30. 暗黄褐色粘質土 |
| | | 31. 灰褐色粘質土 |

第36図 土層図 (1/80)

10 府内城・城下町跡 第27次調査

調査面積 730㎡ 調査期間 H29.5.25～9.6 地域 A 調査担当 小野

1. 調査の概要

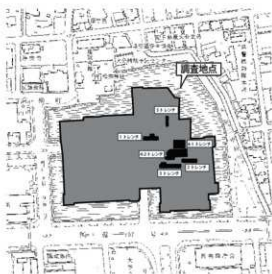
今回の調査は、『大分城址公園整備・活用基本計画』に基づき、府内城跡の遺跡の状態を確認する目的で行った調査である。調査地点は、府内城本丸及び二之丸の東之丸にあたり、調査対象地内に5箇所の調査区を設定して確認調査を実施した。

調査の結果、表土下約0.7m地点で天守取付櫓の石垣や東之丸御殿に関連する遺構、内々堀や廊下橋を取り付く橋台石垣などが検出され、築上当初の状態が確認できた。とりわけ、内々堀と橋台石垣の発見の意義は大きく、内々堀の位置を特定できる成果となった。

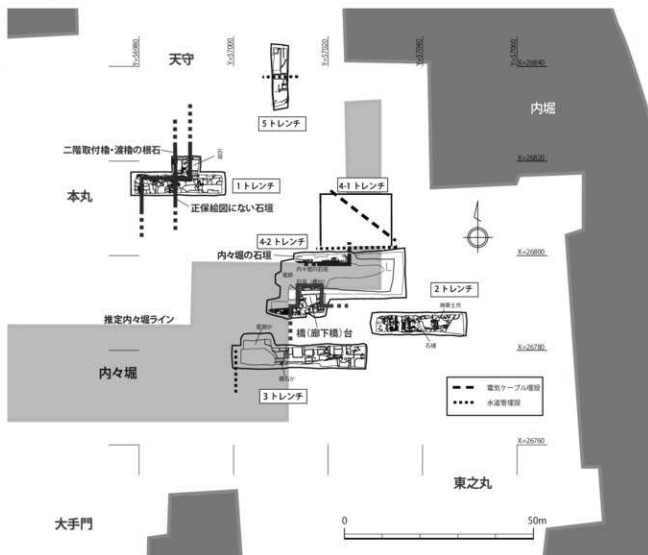
以下に各トレンチの調査成果をまとめる。

(1) 1トレンチ 【天守曲輪推定地の調査】

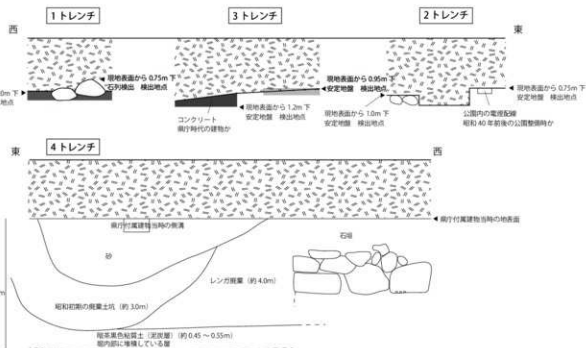
1トレンチは、現存する天守台石垣の南側に設定した調査区である。重機により掘削を行ったところ、表土下約0.7～1.0m(標高:4.5m)地点で巨石が並んで検出された。巨石の大きさは約1.0mで、正保元(1644)年に描かれた豊後府内城之絵図(正保絵図)の天守取付櫓及び本丸の渡櫓の根石と判断される。また、特筆される成果として、天守取付櫓の根石の下には整地土層があり、さらにその下位からも南北方向の石垣を確認した。整地土層からは京都系土師器皿が出土しており、その所属年代から16世紀末頃と判断され、下位の石垣はそれ



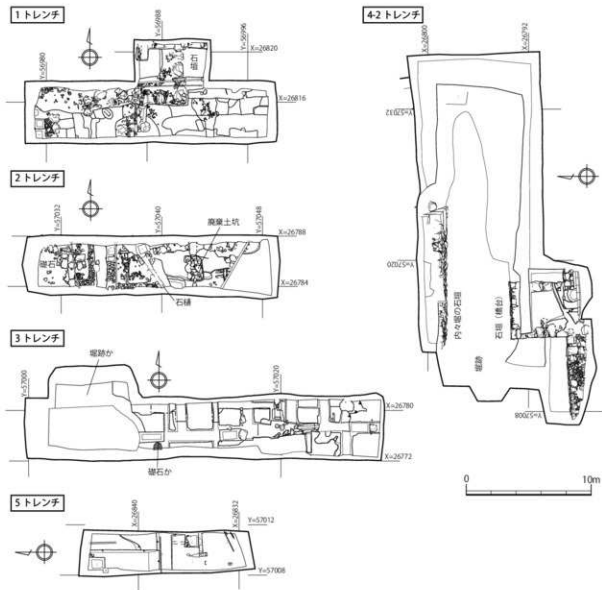
第37図 調査地点位置図 (1/5000)



第38図 トレンチ位置図 (1/800)



第39圖 土層模式圖



第40图 平面图 (1/300)

よりもさらに古い石垣であることが考えられる。

(2) 2・3トレンチ 【東之御殿推定地の調査】

2トレンチ及び3トレンチは、二之丸である東之丸に建てられていた東之丸御殿部分に設定した調査区である。2トレンチでは、表土下約0.7m（標高：4.4m）地点で礎石をはじめ廃棄土坑や溝状遺構などが検出された。調査区の制約上、礎石の並びは確認できていないものの、東之丸御殿を構成する建物の一部である可能性が示唆される。その東側には石樋が南東から北西方向に向けて検出されており、東之丸枡形の石垣に認められる樋に繋がる可能性があるものである。また、石樋などの下には、盛土整地が調査区全面に認められ、整地土層からは京都系土師器皿が出土している。3トレンチでは、表土下約0.7m（標高：4.4m）において、昭和に建てられた県庁施設の建物基礎や、東之丸御殿を構成する建物の一部と考えられる礎石、調査区西側では内々堀の一部とみられる堆積土を確認した。

(3) 4トレンチ 【内々堀推定地の調査】

4トレンチは、正保絵図で二之丸と本丸の間に描かれている堀（便宜上、内々堀とする）の検出を目的に調査区を設定した。4-1トレンチにおいて、重機により表土を掘削したところ、調査区を横断する形で電気ケーブルが埋設されたため、範囲を変更して再度設定した調査区が4-2トレンチである。当該地は、内々堀の中でも本丸と東之丸を繋ぐ廊下橋が架けられた推定地で、表土下約0.8～1.0m（標高：4.1m）地点で堀の石垣が検出された。堀の幅は、約6m、深さは約4.5mで、内々堀の一部と考えられるものである。

また、堀の南側の石垣には「コ」の字状の張り出し部が認められ、この場所が廊下橋の推定地であることを踏まえれば、張り出した石垣部分は廊下橋の橋台と判断される。石垣は隅角部は算木積み、築石は野面積みを行っている。

(4) 5トレンチ 【本丸人質場推定地の調査】

5トレンチは、天守台東側の人質櫓へ向かう道路部分に調査区を設定した。重機により、表土下約1.4mの地点まで掘り下げたところ、水道管が確認されたことから調査を断念した。当該地の遺構の有無については判断できておらず、遺物の出土も見られなかった。

2. まとめ

府内城跡は、大正8年に九州神沖八県連合共進会の会場建設のため内々堀を埋め、その後昭和37年までは大分県庁の建物が建っていた。今回の調査では、そういった近代の遺構により破壊されている可能性があった府内城の遺構が本丸及び東之丸の一部残存していることが確認できた。（小野）



調査区全景（上が西）



1トレンチ全景（南より）



4トレンチ橋台石垣（北西より）



4トレンチ内々堀跡（西より）

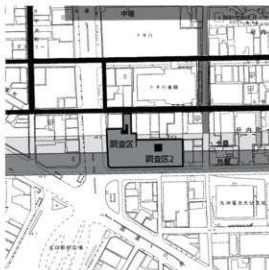
11 府内城・城下町跡 唐人町推定地の調査

調査面積 約167㎡ 調査期間 H30.3.12～3.30 地域 A 調査担当 小野

1. 調査の概要

今回の調査は、「府内城下の復元図」によれば、唐人町と外堀の内側に設けられた土塁部分にあたる。このため、遺構確認を目的に当該地にあった商業施設の建物部分を避けて、確認調査を実施した。

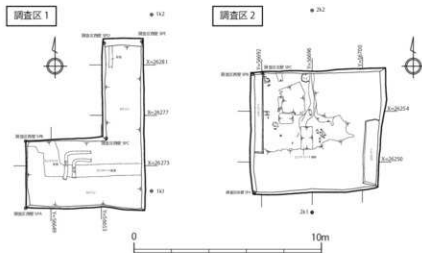
調査の結果、調査区2（東側のトレンチ）において表土下約1cm前後の標高3.2～3.3m地点で、土坑や整地層などの遺構を検出したものの、調査区1（北西側のトレンチ）では建物の建設及び解体時の工事により削平を受けているため皆無であった。調査区2で検出した土坑（SK002）は、陶磁器や瓦の破片が大量に出土しており、江戸時代の廃棄土坑と考えられる。陶磁器の帰属年代から、19世紀中頃～後半頃のものと判断される。整地層は、固く締まった茶褐色粘質土層で、全体的に炭化物を微量に含む堆積土である。遺物は僅少で、施工時期の特定はできていない。周辺の調査成果から城下町建設当初に行われた整地である可能性が指摘されるものである。



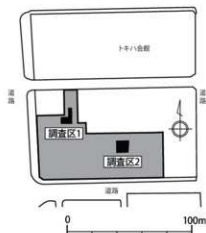
第41図 調査地点位置図 (1/5000)

2. まとめ

今回の調査地点は、府内城・城下町の外堀の土塁推定地にあたるものの、調査では近世の整地層を検出したのみで、土塁の積み土等は確認できなかった。そのため、土塁の位置は、調査区2よりも南側と考えられる。（小野）



第43図 平面図 (1/300)



第42図 トレンチ位置図 (1/3000)



調査区2検出状況全景 (東より)



調査区2西壁土層拡大 (南東より)

12 古国府遺跡群（羽屋・園遺跡）

調査面積 約24㎡

調査期間 H29.6.14

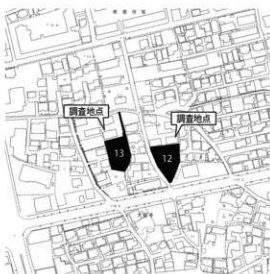
地域 A

調査担当 松浦

1. 調査の概要

今回の調査は、宅地造成工事計画に伴い、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的に実施したものである。調査地周辺の地形は、かつて南側に河道が広がり、それに合流する南北方向の小河道に沿って自然堤防が形成されていた地点にあたる。この自然堤防上には、古国府遺跡群の一つとしての羽屋井戸遺跡や羽屋園遺跡において行われたこれまでの調査成果により7世紀～8世紀前半頃までの大型掘立柱建物群をはじめ、古墳時代の竪穴建物跡や溝状遺構などが所在していることが判明している。調査では、対象地内の北側に東西約10m、南北約2mのトレンチを設定して確認調査を実施した。

調査の結果、表土下約30cmの暗黄褐色粘土層上位（標高10.8m地点）において溝状遺構と土坑群などを確認した。溝状遺構は、明確な遺物は出土していないものの、その位置関係から周辺の羽屋・園遺跡第2・3次調査区などで検出されている6世紀中頃～後半頃の区画溝の一部と考えられる（第45図）。また、土坑群の中の土坑（SK002）から古墳時代の土師器片が出土しており、土坑群についても古墳時代のもと考えられる。

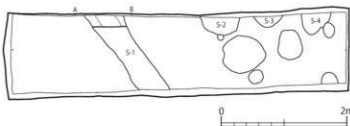


第44図 調査地点位置図 (1/5000)

2. まとめ

今回の調査では、溝状遺構と土坑群を確認した。溝状遺構は、周辺調査の区画溝と同一であれば、その長さは150m以上で、当該期の集落様相は明確ではないものの、そういった古墳時代の集落を広域に区画する施設が展開していたものと想定される。

また、調査では、刻目突帯文系の弥生時代早期頃の壺の破片が出土している。破片であるため図示できていないが、調査区の北方に位置する上七曾子遺跡では同様に刻目突帯文の甕が溝状遺構から出土しており、弥生時代早期～前期頃の集落が周辺一帯に展開していた可能性も指摘される。（松浦）



第45図 平面図・土層図 (1/60・1/40)



トレンチ検出状況（西より）



トレンチ検出状況（西より）

13 古国府遺跡群（羽屋・園遺跡）第21次調査

調査面積 約56m² 調査期間 H29.10.25～26 地域 A 調査担当 松浦・米倉・荒木

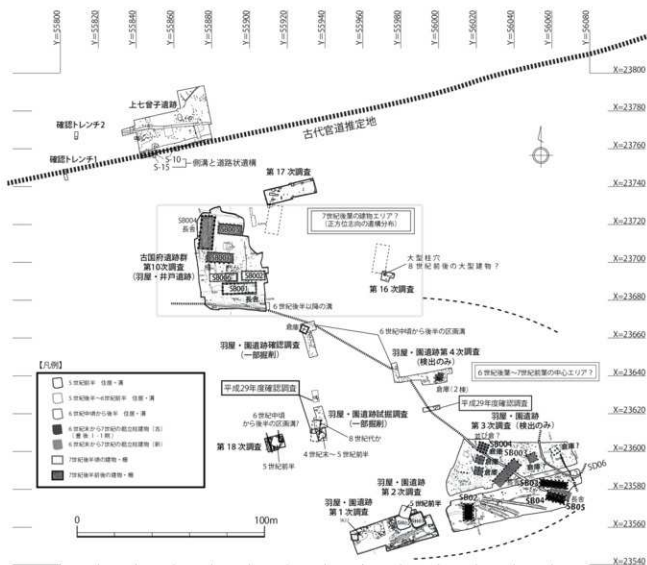
1. 調査の概要

今回の調査は、宅地造成工事計画に伴い、遺構の分布状況と周辺に展開する掘立柱建物跡の規模の確定を目的に実施したものである。このため、調査対象地内の北側（１トレンチ）と南側（２トレンチ）に調査区を２箇所設定して確認調査を実施した。なお、２トレンチは平成１１年度の確認調査で掘立柱建物跡の一部を検出した場所の延伸部分である南側隣接地に設定した。

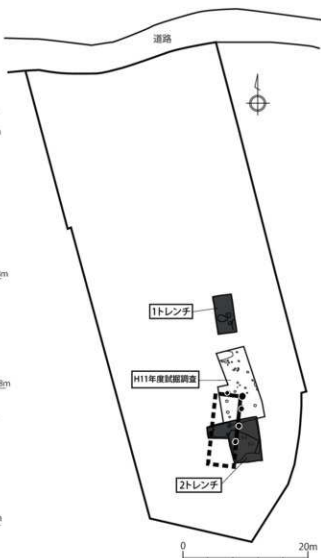
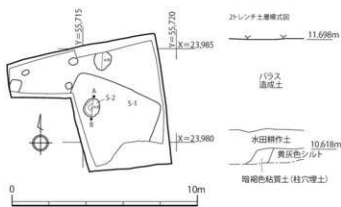
調査の結果、1トレンチでは表土下約1.0m、2トレンチでは表土下約1.2cm地点において遺構が検出された。1トレンチでは土坑とビット、2トレンチでは竪穴建物跡と土間を検出した。柱穴穴は、平成11年度の調査で確認された掘立柱建物跡の一部である。建物跡はさらに調査区の南側に延びている可能性が高い。竪穴建物跡は2.4m程度の平面方形と考えられるものである。遺構埋土の掘削を行っていないため詳細は不明ながらも、炭化物や焼土の集中部が埋土に認められることから、焼失した可能性も指摘される。小型丸底甕が完形で出土しており、その所属年代から4世紀末～5世紀前半頃の遺構と判断される。

2. まとめ

平成11年度に確認された掘立柱建跡については、さらに南側に伸びる可能性もあり、規模を確定させることはできなかった。また周辺での建物跡の展開については、1トレンチでは確認できず、すくなくとも北側へ建物跡が展開する可能性は強いと考えられる。なお、今回4世紀末～5世紀前半頃の竪穴建物跡を確認し、第18次調査とともに周辺に当該期の竪穴建物跡群が展開することが判明した。(松浦)



第46图 古国府遺跡群周辺遺構分布図 (1/2000)



2トレンチ拡張後検出状況 (北より)



2トレンチ北壁土層 (南より)

14 東田室遺跡

調査面積 約10㎡ 調査期間 H29.4.27 地域 A 調査担当 松浦・荒川

1. 調査の概要

今回の調査は、宅地造成工事計画に伴い、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的に実施したものである。調査地は住吉川(毘沙門川)右岸の自然堤防上に位置し、弥生時代前期末頃から集落が形成されていた地点である。このため、対象地内の南側に東トレンチを設定して確認調査を実施した。

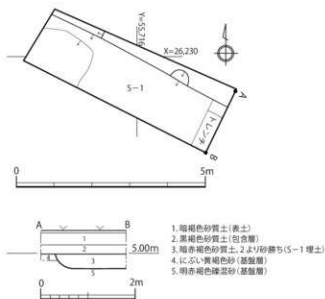
調査の結果、遺構は表土下約0.5m地点において竪穴建物跡、土坑などが検出された。竪穴建物跡は、深さは約0.3mで、平面規模は不明であるが、方形または長方形を呈すると考えられる。出土遺物には土師器の高坏や姫島産黒曜石などがあり、土師器の歸属年代より4世紀前半頃と判断される。

2. まとめ

今回の調査で主に現道路の東側で確認されている竪穴建物跡が、より河川に近い西側にも展開していることが判明した。また、表土下0.3m地点には厚さ約0.2mの黒褐色砂質土の堆積が認められ、土師器が多数出土している。この堆積土は遺物包含層と判断されるが、今後周辺の埋蔵文化財の保護措置を図る際には、その対象として慎重な取り扱いが必要となる。(松浦)



第51図 調査地点位置図 (1/5000)



第53図 平面図・土層図 (1/100・1/80)



第52図 トレンチ位置図 (1/600)



検出状況 (西より)



調査区東壁土層 (西より)

15 下郡遺跡群

調査面積 約100㎡ 調査期間 H29.7.26 地域 A 調査担当 小野

1. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設計画に伴い、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的に行なったものである。調査地点は、大分川河口付近の右岸に広がる自然堤防上に位置し、戦国時代から江戸時代の南北道路（泉小路）推定地にあたる。調査は、対象地に4箇所のトレンチを設定し確認調査を実施した。

調査の結果、道路推定地において、表土下約0.8m地点で南北方向の溝状遺構（S-1）が検出された。溝状遺構は、調査区の西寄りに位置しており、調査区外に南北方向に伸びているものと判断される。深さは約0.5mを測り、断面形状は逆台形を呈す。埋土は、非常に粘質の強いグライ化した土である。遺構からは、江戸時代終わり頃の唐津焼の播鉢や肥前系広東碗の破片などが出土しており、その所属年代から幕末頃のものと思われる。

2. まとめ

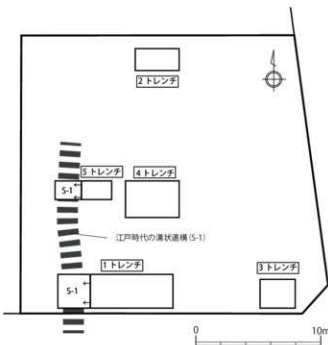
今回の調査では、戦国時代から江戸時代の南北道路（泉小路）が推定されている地点において、南北方向の溝状遺構を検出した。遺構の特徴と出土遺物から、推定されている南北道路に関連した遺構の可能性が高く、幕末頃に埋まったことが考えられる。（小野）



第54図 調査地点位置図 (1/5000)



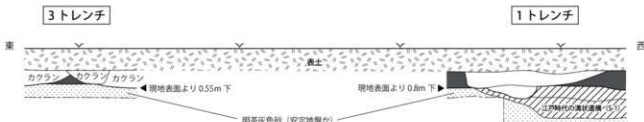
1トレンチ検出状況 (東より)



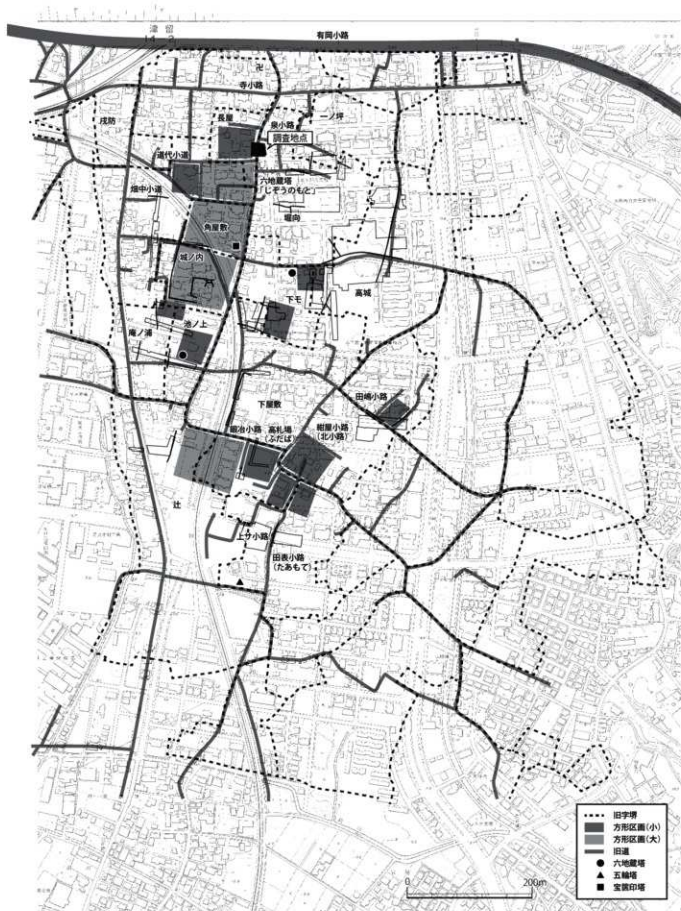
第55図 トレンチ位置図 (1/300)



1トレンチ南壁土層 (北より)



第56図 土層模式図



第57図 下郡遺跡群中世後期遺構と字図にみる方形区画分布図 (1/6000)

16 羽田遺跡

調査面積 約37㎡

調査期間 H29.11.2・30.3.13

地域 A

調査担当 松浦・留野・米倉

1. 調査の概要

今回の調査は、社屋建設計画に伴い、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的に行なったものである。調査地は大分川右岸に沿って南北方向に伸びる自然堤防の地形変化点に位置する。このため、調査対象地内の南側に東西方向のトレンチを設定して確認調査を実施した。

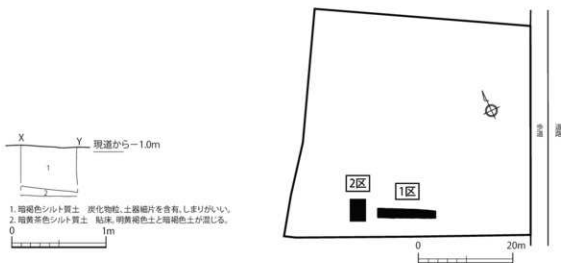
調査の結果、表土下約1.1m（現道下約1.0m）で円形の竪穴住居跡などが検出された。1区西側の竪穴住居跡（SH002）からは弥生時代の甕の破片が出土しており、その帰属年代から弥生時代後期のものと判断される。住居跡の床面には貼り床が認められる。

この確認調査成果を踏まえて開発事業者と協議を行ったところ、開発事業者の協力を得て、工事計画が変更されることとなった。この工法変更により遺跡の大部分については保護が図られたものの、浄化槽埋設部分については、遺跡の破壊が免れなかったことから、工事に伴い浄化槽埋設部分の調査を行うこととなった。

2区はその工事立会時の調査区で、遺構は表土下約0.8m地点で竪穴建物跡や土坑などが検出された。竪穴建物跡（S-3）は方形を呈すると考えられ、深さ約0.2mである。一部で貼り床（第63図3層）を確認し、また竪穴建物跡の南側では地床炉と考えられる被熱した焼土の範囲を確認している。出土遺物には土師器の甕や壺の破片があり、古墳時代初頭頃の遺構と判断される。そのほかにも竪穴建物跡と考えられる遺構（S-4・5）を確認したが、調査の制約上完掘することができず、一部の掘削で調査を終了している。

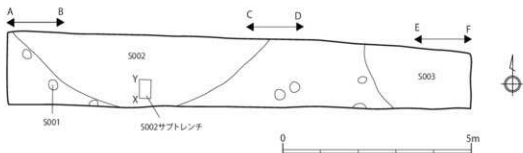


第58図 調査地点位置図 (1/5000)



第60図 1区サブトレンチ土層図 (1/40)

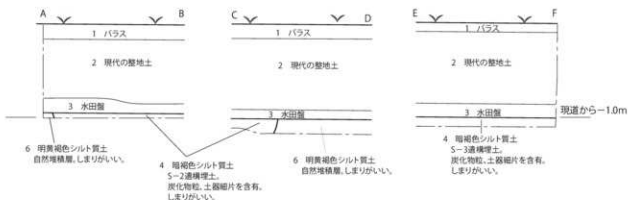
第59図 トレンチ位置図 (1/800)



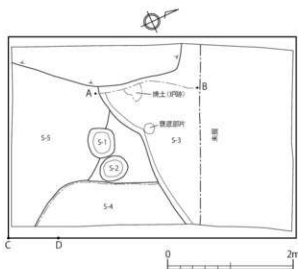
第61図 1区平面図 (1/100)

2. まとめ

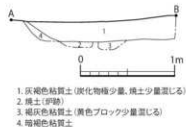
今回の調査では、弥生後期から古墳時代初頭の竪穴建物跡などの遺構が高密度で分布していることが判明した。東側隣接地の羽田遺跡第7次調査でも、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡が確認されており、周辺に集落が展開していたものと考えられる。ただ、調査対象地の西側では、現地形が川に向かって低くなっており、今回の調査地がおおよそ自然堤防及び当該期集落の縁辺にあたるものと考えられる。(松浦)



第62図 1区土層模式図



第63図 2区平面図 (1/60)



第64図 2区土層図 (1/40)



トレンチ検出状況 (西より)



一部掘削状況 (北より)

17 横尾遺跡

調査面積 約46㎡ 調査期間 H29.4.18 地域 E 調査担当 小野・留野・佐藤

1. 調査の概要

今回の調査は、宅地造成計画に伴い、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的に行なった確認調査である。調査地点は、標高約40m前後の鶴崎台地上に位置し、横尾遺跡の南西隅部にあたる。調査区は、対象敷地内の全域に6箇所のトレンチを設定して実施した。

調査の結果、いずれのトレンチも表土と造成土を除去したところ、調査区全面に段丘礫層である可能性が高い明茶褐色粘質土の安定地盤が確認される。明茶褐色粘質土の上面において遺構の確認を行ったが検出されず、遺物の出土も認められなかった。

2. まとめ

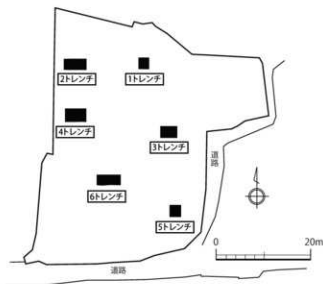
敷地内に広がる造成土は、地形に沿って西側から東側に厚く堆積し、この土層には先に述べた明茶褐色粘質土がブロック状に多く含まれていることから、当該地帯は削平により、遺跡が残っていないものと判断される。(小野)



第65図 調査地点位置図 (1/5000)



2トレンチ検出状況 (北より)



第66図 トレンチ配置図 (1/800)



第67図 土層模式図

18 地蔵原遺跡

調査面積 約17㎡ 調査期間 H29.9.13 地域 G 調査担当 池邊

1. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設計画に伴い、遺構の分布状況と遺構検出深度の確認を目的に行なったものである。調査地は乙津川の左岸に広がる鶴崎台地上に位置し、奈良時代の官衙遺跡が発見された昭和57年度調査地の西側約100m地点にあたる。

このため、調査対象地内に南北約5m、東西約3mのトレンチを設定して確認調査を実施した。

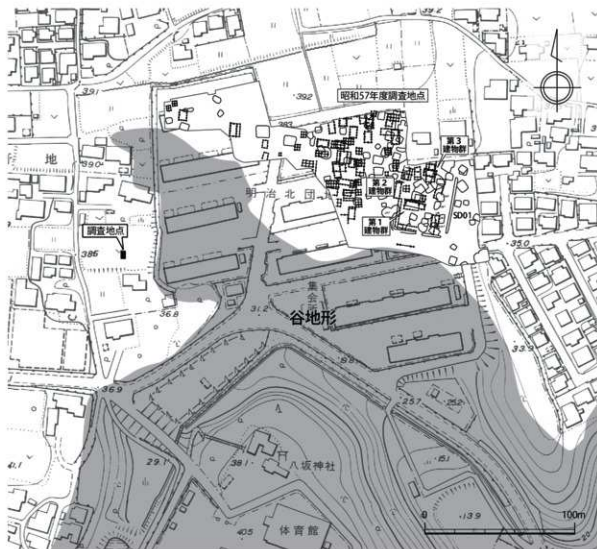
調査の結果、遺構は表土下約0.7m地点で柱穴列や細い溝状遺構などが検出された。柱穴列を構成する3基の柱穴にはすべて柱痕が認められ、柱間が約1.76mであることが判明した。柱穴列の内、柱穴(SA001a)からは土師器環や鉢の破片が出土しており、その所属年代から8世紀～9世紀頃のものと判断される。

2. まとめ

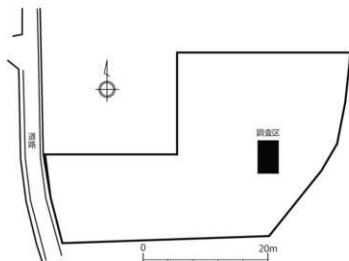
今回の調査地は奈良時代の官衙遺跡が発見された地点と近接するものの、その間には谷が開析しており、同時代の遺構の広がりも予測できていなかった。地蔵原遺跡は、大分市の古代の歴史解明には欠かせない遺跡の一つであり、今回の調査成果を踏まえて、奈良・平安時代の官衙遺跡の広がりを西側にも想定しておく必要がある。(池邊)



第68図 調査地点位置図 (1/5000)

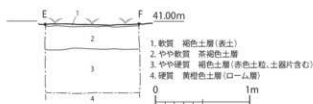


第69図 地蔵原遺跡周辺遺構分布図 (1/1500)



第70図 トレンチ位置図 (1/600)

南壁土層図



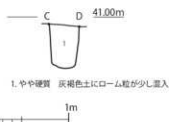
第71図 平面図 (1/50)

S-1 土層図



第72図 土層図 (1/40)

S-2 土層図



トレンチ検出状況 (北より)



S-1半截状況 (東より)

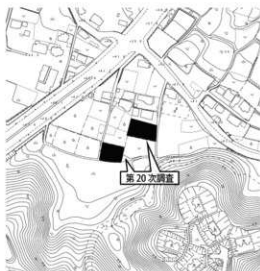
19 城原・里遺跡 第20次調査

調査面積 約271㎡ 調査期間 H30.2.16～3.20 地域 G 調査担当 小野・荒川

1. 調査の概要

今回の調査は、海部郡衙関連遺跡の範囲確認を目的に行なったものである。調査地は別府湾を北側に望み、東側には丹生川が流れる標高約40mの丹生台地の東部に位置する。既往の調査成果より、調査区北西部で確認された奈良時代の大型掘立柱建物群が海部郡衙政庁跡である可能性が高く、その中心域の東側丘陵において郡衙周辺に存在するとされる正倉域が推定されている。平成28年度までの調査では、古代に比定できる遺構や遺物が確認されなかったため、今回さらに東側に調査地点を移動して確認を行った。調査は、対象敷地内に3箇所のトレンチを設定して確認調査を実施した。

調査の結果、遺構は表土下約0.3m地点で、調査区1では掘立柱建物跡や柱穴列、調査区2では竪穴建物跡や柱穴列、調査区3では竪穴建物跡などが検出された。調査区1の掘立柱建物跡(SB010)は、調査区の制約から棟数や展開状況は不明である。柱穴は直径0.5m程度の円形で、平面で精査を行ったところ柱痕が見られた。一部半截すると、深度は約0.6mを測り断面形状は逆台形を呈している。半截した柱穴からは、第80図4の古墳時代の土師器碗の破片が出土した。調査区1内の北側では、暗茶灰色土の堆積が部分的に確認され、大型遺構もしくは整地層などの可能性が考えられる。



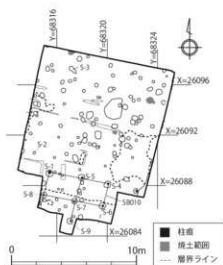
第73図 調査地点位置図 (1/5000)

2. まとめ

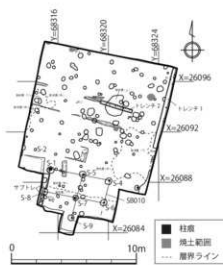
城原・里遺跡第2・3次調査周辺では、これまでに正倉などを示す遺構がなかったため、確認対象地を東側に移動して調査を行ったが、今回初めて海部郡衙推定地の東側丘陵上の城原地区において、掘立柱建物跡や古代の遺物の出土が確認され、海部郡衙の正倉域の解明に向けた新たな展開が期待できる成果である。しかし、掘立柱建物跡や柱穴列の展開状況及び時期が明確にはなっておらず、平成30年度は今回の調査区1の南側隣接地に調査区を設定し、詳細を確認していく予定である(小野)



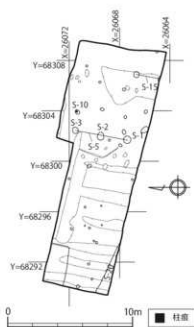
第74図 トレンチ位置図 (1/300)



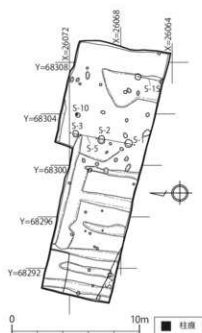
第75図 1区遺構配置図 (1/300)



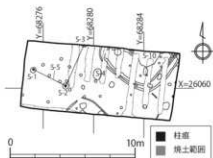
第76図 1区全体遺構図 (1/300)



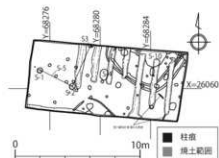
第77図 2区遺構配置図 (1/300)



第78図 2区全体遺構図 (1/300)



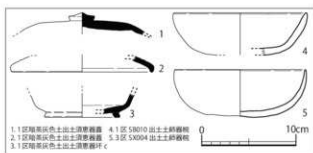
第79図 3区遺構配置図 (1/300)



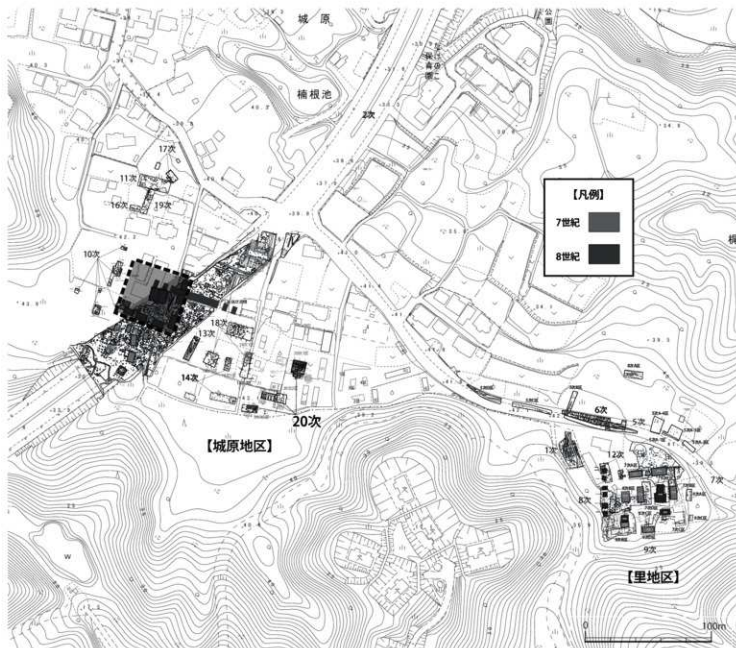
第80図 3区全体遺構図 (1/300)



城原・里遺跡第20次確認調査地点（南より）



第81図 出土遺物実測図（1/4）



第82図 城原・里遺跡古代遺構配置図（1/3000）

20 野津原御茶屋跡

調査面積 約101㎡ 調査期間 H29.5.23～24・9.6～8 地域 H 調査担当 松浦・荒木・米倉

1. 調査の概要

現在の野津原小学校の周辺は、江戸時代熊本藩が肥後街道の宿場町として領地にした場所で、野津原には、宿場町を管理する役所としての野津原御茶屋跡が設置されていた。野津原小学校（旧野津原東部小学校）は古くから野津原御茶屋の比定地とされていた場所である。ただ、平成29年度当初の段階では、周知の埋蔵文化財包蔵地としての登録はなされていなかった。そのような状況の中、小学校の東側隣接地において道路拡幅工事が計画されたことから、工事を所管する市の担当課と協議を行い、野津原御茶屋跡の範囲確認を目的に工事対象地内に3箇所のトレンチを設定して試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、表土下約0.3mで溝状遺構が検出された。遺構の埋土を一部掘り下げたところ、肥前系の染付碗などが出土したことから、これらを江戸時代の遺跡と判断し、大分県教育委員会教育長へ遺跡の新発見の通知を平成29年5月26日付けで行った。これを受けて、大分県教育委員会教育長より新登録遺跡「野津原御茶屋跡」として通知がなされ、平成29年6月7日付けで野津原小学校（旧野津原東部小学校）一帯が周知の埋蔵文化財包蔵地となった。

2. 確認調査の成果

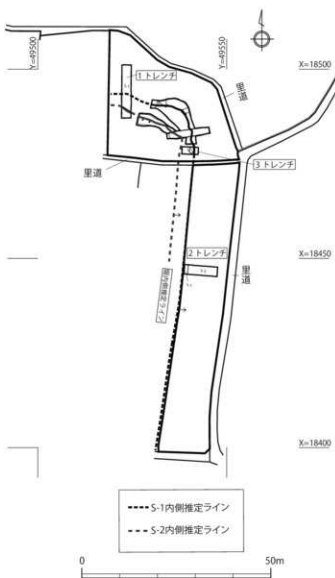
周知の埋蔵文化財包蔵地への登録後、道路拡幅工事の計画が具体的に進められたことから、改めて担当課と協議を行い、工事に伴う確認調査として、工事対象地における野津原御茶屋跡の様相確認を目的に、平成29年9月に調査を実施した。

調査の結果、2条の溝状遺構のほか、柱穴列や石列などを確認した。溝状遺構は、幅約10m以上、深さは約2mの断面形状が逆台形を呈する大溝（SD002）と、それを切る幅約2m、深さ約1mの断面形状U字形を呈する溝（SD001）があり、ともに平面逆L字状に曲がる。溝（SD002）が廃絶した年代は、出土した肥前系染付丸碗の帰属年代から18世紀前半頃、溝（SD001）の廃絶年代は、出土した肥前系の丸碗や土瓶の破片、白磁碗の破片などから19世紀前半頃と考えられる。

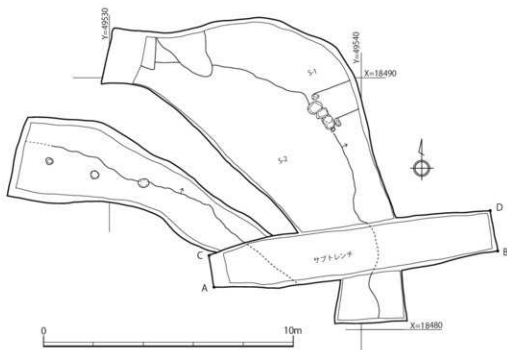
これらの溝状遺構は、その位置と規模から、野津原御茶屋を囲む堀である可能性が高く、初期に御茶屋を囲んでいた堀（SD002）と、その廃絶後に、掘り返されて改修された堀（SD001）であると考えられる。また、改修後の堀（SD001）が折れ曲がる地点では石列を確認しており、土留めなどの目的で置かれた可能性も考えられる。さらに、堀（SD001）で囲まれた内側では、柱穴列（SA001）を確認した。この柱穴列は初期の堀



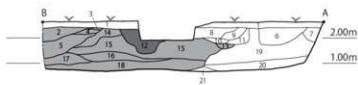
第83図 調査地点位置図 (1/5000)



第84図 トレンチ位置図 (1/1000)

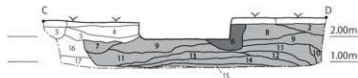


第85図 平面図 (1/150)



1. 耕土・水田層
2. 暗褐色粘質土 (砂レキ多量)
3. 黒褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土 (黄褐色粘土ブロック極多量)
5. 暗灰色粘質土 (黄褐色粘土ブロック少量)
6. 黒色粘質土 (焼土塊少量)
7. 黒褐色粘質土 (焼土塊少量)
8. 暗灰色粘質土 (レキ多量, 9層より暗い)
9. 暗灰色粘質土 (レキ多量, 8層より明るい)
10. 暗褐色粘質土 (焼土塊少量)

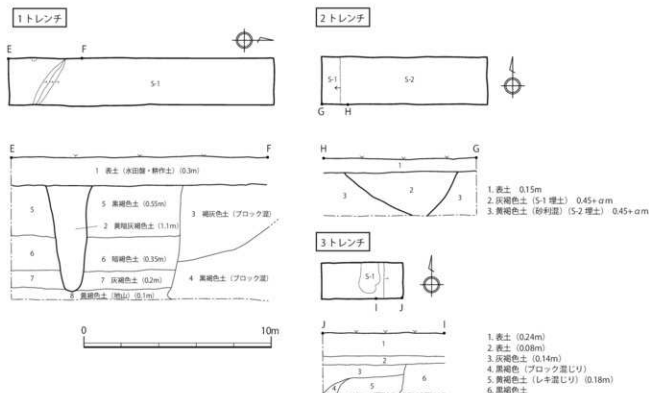
11. 黒色粘質土 (焼土塊少量)
12. 灰褐色粘質土 (レキ多量, 黄褐色ブロック極多量, 黒褐色ブロック多量)
13. 灰褐色粘質土 (褐色ブロック少量)
14. 黒褐色粘質土 (褐色ブロック多量, 焼土塊少量)
15. 黒色粘質土 (あまり見られない, 焼土塊少量)
16. 暗褐色粘質土 (褐色ブロック極多量, レキ中量)
17. 黒褐色粘質土 (褐色ブロック少, レキ中量)
18. 黒色粘質土 (黄褐色ブロック極多量, レキ少量)
19. 暗灰色粘土
20. 黄褐色砂レキ混粘土
21. 黒色粘土



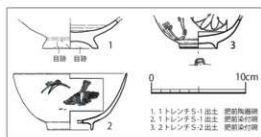
1. 耕土・水田層
2. 暗灰色粘質土 (黄褐色ブロック少量)
3. 黒褐色粘質土 (焼土塊少量)
4. 暗褐色粘質土 (黄褐色ブロック極多量)
5. 暗褐色粘質土 (焼土塊少量)
6. 灰褐色粘質土 (レキ多量, 黄褐色ブロック極多量, 黒褐色ブロック多量) (⇒A-Bの12に対応)
7. 黒褐色粘質土 (黄褐色ブロック極多量)
8. 黒褐色粘質土 (褐色ブロック多量, 焼土塊少量) (⇒A-Bの14に対応)
9. 黒色粘質土 (あまり見られない, 焼土塊少量) (⇒A-Bの15に対応)

10. 褐色粘質土 (黄褐色ブロック少量)
11. 暗褐色粘質土 (褐色ブロック極多量, レキ中量) (⇒A-Bの16に対応)
12. 黒褐色粘質土 (褐色ブロック少, レキ中量) (⇒A-Bの17に対応)
13. 黒色粘質土 (黄褐色ブロック極多量, レキ少量)
14. 黒色粘質土 (焼土塊少量, 黄褐色ブロック極多量, レキ少量) (⇒A-Bの18に対応)
15. 黒色粘質土 (黄褐色ブロック極多量, レキ少量)
16. 暗灰色粘土 (⇒A-Bの19に対応)
17. 黄褐色砂レキ混粘土 (⇒A-Bの20に対応)

第86図 土層図 (1/150)



第87図 トレンチ平面図・土層図 (1/200)



第88図 出土遺物実測図 (1/4)



S-1検出状況 (南より)

(SD002) を切っていることから、初期の堀 (SD002) が廃絶し、新たな堀 (SD001) が構築された後に御茶屋の敷地に建てられた建物などの施設の一部と判断される。

3. まとめ

今回の調査では、野津原御茶屋跡を囲むと考えられる堀が確認された。隣接する野津原小学校の敷地を見てみると、その平面形は方形であり、その小学校の敷地を囲むように江戸時代の堀が確認されたことから、野津原御茶屋跡の範囲は、野津原小学校の敷地とほぼ同じである可能性は高いものと推定される。

熊本大学の永青文庫に保存される野津原御茶屋跡の指図からは、御茶屋の敷地内に建物が規則的に配置されていたことが想定される。御茶屋の所在地が確定した今回の調査成果は大きく、遺跡の解説看板を小学校の正門付近に設置して、新たに発見された遺跡の紹介をはじめたところである。(松浦)



S-1検出状況（北西より）



S-1検出状況・土層（南より）



S-1土層近景（南より）



S-1土層（北より）



サブトレンチ北壁土層（東より）



サブトレンチ南壁土層（西より）



サブトレンチ拡張部検出状況（北西より）



2トレンチ石列検出状況

第 3 章

- 42 -

